

かちかち山・出雲市乙立町

令和3年12月14日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



語り手 伊藤アキコさん
(大正5年生まれ)
収録・平成5年7月4日

あらすじ

とんとん昔。おじいさんとおばあさんは前山の兔を手前の娘のようにしてかわいがっていた。

おじいさんは畑を打ついたら狸が出て来て、

あほのじいさん畑打ち豆のないのに えっさっさ

と種の豆をみんな食べてしまうので、おじいさんが腹を立てて、追いかけても逃げてしまったげな。

おじいさんは明るる日、野良仕事をしていたら、狸が出てきて、

あほのじいさん出てきたか
と言いかけたけれど、足が動かないようになってしまったげな。

「おじいさん、鳥モチを岩につけちよいたら」というわけで、狸を捕まえて、持って帰って、それから天井から吊り下げておいたげな。

「おばあさん、今夜は狸汁でもすうがいいけに」と言っておじいさんが畑仕事に出ていったら、

「狸汁で言ったが、自分を

殺さかと思つちようかーと狸が思つて、

「おばあさん、殺されえ前におばあさんにお手伝いがしたいけに、この縄解いてごさんか」と言った。おばあさんは狸の縄を解いてやり、杵を狸に渡したら、

「おまえをついて殺いてやあ」と狸はおばあさんをたいて殺いてしまつて逃げてしまつたげな。

おじいさんがもどつてみたらおばあさんが死んでおり、悔やんでいたら、兔が出てきて、

「このかたきは取つてあげる」と明るる日に兔が狸のところへ行った。

「山へ薪こりに行かんか」

「ほんなら行きてみいがいいかも知れん」と狸が言うので、

「一緒に木こりに行つて、狸に一荷負わせてついて帰るとき、火打ち石で狸の荷に火をつけたげな。」

狸の背中が火が燃え、熱くて狸は川へ飛び込んで火を消したつて。兔は逃げてしまつたげな。

狸は、苦しくて寝ていたら、また兔が出てきた。

「狸さん、どげしたごかね」

「あぎやんこと言うな。おまえが火つけたで、背なが焼けた」

「そぎやんことしたやなら、薬つけてあげえわ」と言つて、トウガラシの練ったやつをつけたので、狸はまた川へ飛び込んで、薬をきれいに洗い落として寝ていたげな。

明るる日に兔がまた来て、「舟に乗つて出てみよこい。泥舟の方がええやつが出来いかも知れんけん」と狸には泥舟こしらえ、兔は木で舟をこしらえたげな。

舟に乗つて出かけたら深いところで泥舟が溶け出したから、

「兔さん、助けてごしえ」と狸が言う。兔は狸の舟を向こうへ押して、

「おばあさんのかたき討ちだけん」と言つたげな。とうとう泥舟は沈んで狸は死んでしまつたげな。

解説

語り手は明治生まれの方と思われるが正確な生年不詳である。出雲地方にも、タヌキの歌が省略されず語られていた。こうしてあまり形の崩れていない本格的な語りはまだ存在していたのである。そのことを知って、うれしく思うのはわたしだけであろうか。

(元島根大学法文学部教授)

